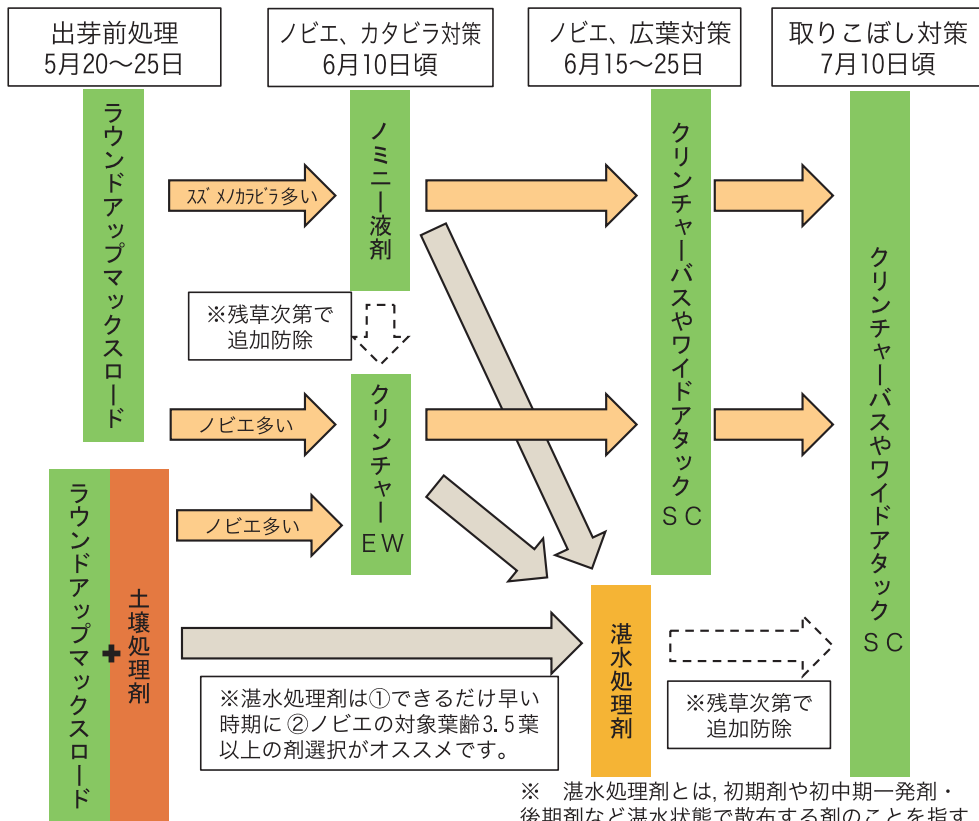
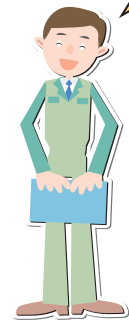


6 除草体系

POINT 1 たどってみよう除草剤チャート



これまで茎葉処理剤主体の除草体系が主流でしたが、近年は土壌処理剤や湛水処理剤を用いた省力・省コストな除草体系も研究され、選択肢が多くなりました。



※ 湛水処理剤とは、初期剤や初中期一発剤・後期剤など湛水状態で散布する剤のことを指す

POINT 2 体系処理例のコスト

・茎葉処理剤主体の除草体系例

入落水回数が多く薬剤も高コストですが、散布のチャンスは多く雑草を取りこぼしにくい体系です。

ラウンドアップ
マックスロード

約700円

ノミニ
液剤

約1,200円

クリンチャーEW



約2,200円

クリンチャーバス
ワイドアタックSCなど

約4,200円



約3,900円

合計：約8,000円/10a

・土壌処理剤と湛水処理剤の除草体系

タイミングを逃すと取りこぼしやすいですが、散布の手間が少なく安価な体系です。

ラウンドアップマックスロード

+
土壌処理剤

約700円



約1,500円

カントダウやカセータ（初中期一発剤）
セカンドショット（中後期剤）など

※ 剤の選択は発生雑草に応じて行う



約2,800円～3,400円

合計：約5,500円/10a

POINT 3 効果的な除草がコストカットの第1歩

乾田直播栽培における最重要項目として、コスト低減があります。現状、10aあたりの除草剤費が農業者によって大きくばらついていることがわかっています（JA いわみざわ栽培履歴データより）。

高価な茎葉処理剤主体の除草体系や、雑草を取りこぼして追加防除することで農薬費があがり、収益性を落としています。

乾田直播は種子代や農薬代が高止まりで、所得率が低く、徹底的なコストカットが求められます。土壌処理剤や湛水処理剤を積極的に活用して除草剤費を削減していきましょう。

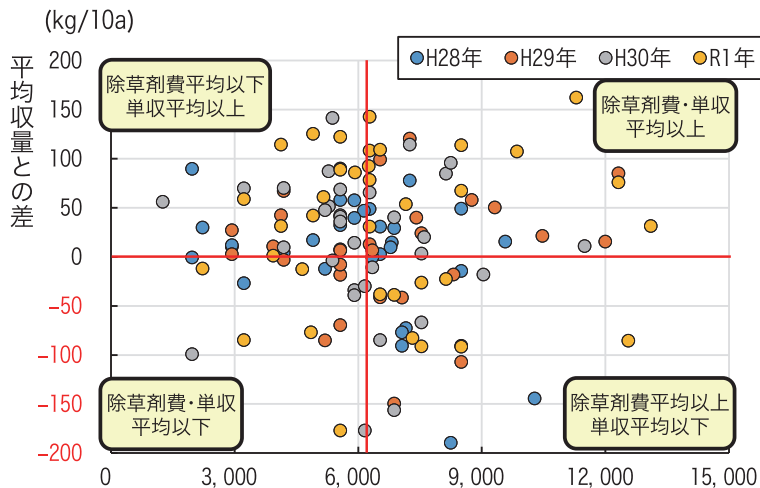


図 23 除草剤費 (円/10a)
H28年～R1年JAいわみざわ栽培履歴データより

農薬をたくさんかけても収量につながらないことは間違いないね。雑草や病害を最低限のコストでしっかり抑えて所得を確保したいね。



POINT 4 出芽前ラウンドアップ使用上の注意点**(1) 処理時期**

イネ出芽直前にスズメノカタビラやノビエなどの雑草が発生しているときに散布しましょう。

スズメノカタビラなどの越年草がある場合は、イネ出芽直前よりも早めに散布して確実に除草しましょう。

(2) 散布ノズル

水滴が大きく飛散しにくいノズルを用いることで、ドリフトのリスクを軽減させましょう。

(3) 10aあたり薬量・水量

- ・薬量 200mℓ
- ・水量 25ℓ

(4) 注意点

薬害防止のため、ほ場表面が白く乾いていることを確認してから散布しましょう。

ドリフト対策として、風の強い日（風速2 m/s 以上）や時間帯は散布を控えましょう。

散布後の入水は翌日以降に実施しましょう。

枯死しない越年草が残草したり、発生が高密度の場合は、2回目の散布を行ってもよいです。その場合の薬量は300～400mℓ/10aで水量25ℓで行いましょう。



ラウンドアップ散布

ラウンドアップ散布後
(青いところは未散布の場所)

POINT5 効果的な除草がコストカットの第1歩

(1) マーシェット乳剤の登録内容

作物名	適用雑草名	使用時期	薬量	水量
直播水稻	水田1年生雑草	乾田直播の 入水10日～2日前	500mL/10a	通常散布 50～100L/10a ※少量散布 25～50L/10a

(2) マーシェット乳剤の効果



イネ出芽前ラウンドアップ+マーシェット区
(令和2年7月30日撮影)



イネ出芽前ラウンドアップのみ区
(令和2年7月30日撮影)



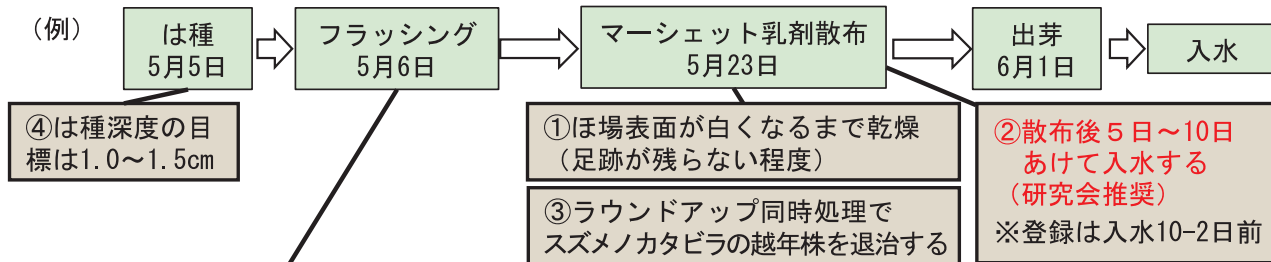
上の写真でマーシェット乳剤はスズメノカタビラに対して効果が高いことが確認できます。イネの生育停滞を招きやすいノミニ液剤を省くことが期待されます。

(3) マーシット乳剤使用上の注意点

！ 超重要 ！

マーシット乳剤のラベル記載注意事項 ※原文ママ

- ① 乾田状態で使用してください。
- ② は種後に湿潤状態が続くと苗立不良のおそれがあるので使用しないでください。
- ③ 入水前処理では、本剤散布前に発生した雑草を防除しておいてください。
- ④ 薬害のおそれがあるので、は種後の覆土が極端に浅い条件で使用しないでください。



土壌処理剤の薬害を回避するために、上記の注意点は確実に守りましょう。
今後さらに具体的な対策を立てるために、情報収集を進めています。



(4) 薬害対策の具体的な水管理

マーシット乳剤散布後に湛水状態になると、薬剤が溶け出して種もみの近くに移動し、薬害リスクが高まると考えられます。

- ① 散布後5日以内に大雨予報があるときは避けましょう。また、局地的大雨に備えて額縁明きょを施工し表面排水を促しましょう。
- ② 散布後5日間は本格的な入水を控えましょう。
- ③ 部分的に滞水しそうな所はサブソイラ等を施工しましょう。
- ④ 地下かんがいので地表まで水位を上げることは避けましょう。
- ⑤ は種後すぐの散布は避けましょう。できるだけ出芽直前に散布することで薬剤にさらされる期間が短くなり、薬害リスクを減らすことができます。

ほ場が乾燥して心配な場合は、JAや普及センターに相談の上でフラッシングを検討しましょう。また、少量の降雨の場合は薬害のリスクは低いと考えられます。

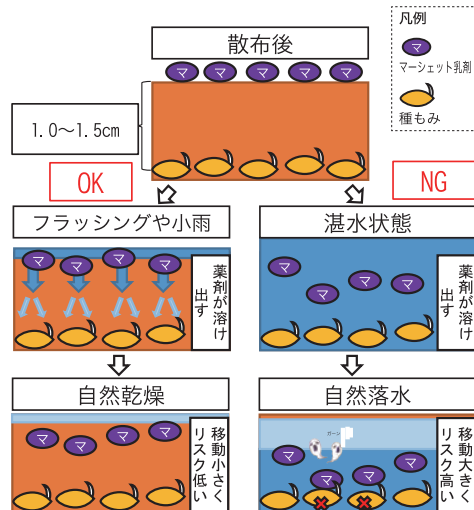


図24 薬剤の移動するイメージ

(5) 甚大な薬害発生事例を紹介

- ・は種日: 5月9日
- ・マーシット乳剤散布 (500mL/100L) : 5月16日
- ・入水日: 5月21日
- ・入水方式: 地下かんがい



この事例は、地下かんがいにより、薬剤が水に溶け出し、種もみの位置まで動いたためと推察しました。



慣行ほ場
苗立本数232本/m²



薬害ほ場
苗立本数110本/m²